パンドーラ（本邦初訳）

ヘンリー・ジェイムズ
出原博明訳

快適なサウサンプトン港に碇を数時間おろして，ここで沢山の旅客が新たに乗ってくるのを受け入れる。これが，ブレーメンからニューヨークへ船客を運ぶノースジャーマンロイド汽船の大分前からの習慣だった。2，3年前のことだが，聡明なドイツ人青年オットー・フォーゲルシュタイン伯爵は，この習慣を咎めるべきか容認すべきか，判断しかねていた。アメリカ人たち —— サウサンプトンで乗船する旅客たちは主にアメリカ人だった —— が道板を渡っているとき，彼はドナウ号の舷から身を乗り出して，船の巨きな収容力に彼らが吸収されていくのを，自分の葉巻の煙幕をすかして，好奇の目で，冷やかに，眺めた。彼は，自分自身には居心地の良い居場所があるということを意識して快い気分だった。このような高見の見物のできる位置から，自分たちよりも恵まれないこれらの人たち —— 情報を貰っていないひと，準備のできていないひと，遅れたひと，困惑したひと —— が競争しているのを観察するのは，愉しくないとはいえぬ暇つぶしである。この暇つぶしに夢中になっている青年の自己満足の手綱をしめるものとしては生来の慈悲心があるだけだった。彼が自分の公職の顕要さをいくら意識したからといっても，慈悲心なるものは，その所為で消滅させられてしまうということにはまだなっていなかったからである。かくいうのは，フォーゲルシュタイン伯爵が官吏風だったからなのだが，そのことは，背筋を真直にしているところやすっきりした上品な眼鏡の光沢からも判るし，また，彼の口髭の曲がり具合には人に対するどことなしの気くばりと外交官風なものを窺わせるところがあって，そこにも見て取れるだろう。この口髭は，皮肉屋たちが唇の主要な

仕事だという —— 腹の中で思っていることを積極的に隠す，ということに貢献しているらしい気配である。彼は，ワシントンのドイツ公使館の書記官に任命されていて，この初秋に任務に就こうとしていたが，そんな目的にはぴったりの性格だった —— 真面目で，礼儀正しく，もったいぶったところがあり，好奇心が強く，頑固なのだ。頭には知識がいっぱい詰まっており，ドイツ帝国は最近再編成されたが，あらゆる民族の中の一番偉大な民族というものに備わっている最高の可能性を見せつけてこの上ない感銘を与えている，と確信していた。しかし，経済等のことに関してはアメリカ合衆国が敬意を要求する資格があるということや地球上でこの地域が研究のための広大な舞台を提供していることを認識していた。

船客の誰にもまだ話し掛けていないにも拘わらず，彼にとってはその探求は既に始まっていた。実際，フォーゲルシュタインは，舌だけではなくて，目で —— あの眼鏡で，ということになるのだが —— 耳で，鼻で，口蓋で，感覚と器官のすべてで探究するのだった。ひどく廉直な青年であり，唯一の欠点は，喜劇の感覚，つまり，ものごとの諧謔についての感覚というものが幾つかの他の意識から解き放たれて自立するということがこれまで一度もなかったということである。このことについては何とかしなければならないと，漠然と感じ，彼は普通並みにそれを目論んでいた。というのは，今や彼は喜劇的な様相に満ちた社会を探究しようとしていたからである。自分に欠けている一つの尺度をこのように意識することで，彼は自分についての評価に対していくらか懐疑的になった。用心深さというものが外交の根幹を成す要素であるならば，この若い野心家は有望なのだ。ただ頭の中には数百万の事実が入っていて，あまりにもぎっしり詰まっているので想像力という微風がそこを通り抜けることができない。ワシントンの上司に早く着任報告したかった。イギリスのしきたりの研究は任務には無かったので，イギリスの港でのこの時間の損失は，彼にとっては，迷惑以外の何ものでもありえなかった。他方，その日は，魅力的な日であり，いちめんに光の粒で飾られたサウサンプトンの青い海には，果て知れぬきらめきだけがうごいていた。さらにいう

なら，なんとか間にあって下船することになるにちがいない合衆国での自分の幸福については，彼は全然確信がもてないでいるのだった。但し，このことは，彼にとってはさほどのことではなくて，幸福というものは彼のような教育を受けた者の場合は思考の沈黙の中に於てさえ恥じなければならないような非科学的な言葉であるということを知ってもいた。にも拘わらず，軽薄な群衆に注意を奪われてしまったり，自分の国に居るのでもなく自分が派遣されたことになっている国に居るのでもないということを感じたりして，彼は単なる一個の自己人格というものに退行していたのだ。こういうわけで，彼は，待たされている間，自分の体面を守ろうとして，イギリス領海でドイツの汽船がこうむっているこの遅滞に判定をくだすため，目の前にある拠りどころを考え出した。つまり，この遅滞が，情況が実際に必要としている以上にかなり長引いているということを，彼の手元にある諸事実，数量，記録 —— 少なくとも時計 —— で証明できないとでもいうのであろうか，と考えてみたのである。

フォーゲルシュタイン伯爵は，見解というものをもつことが必要だと考えているわけで，駆け引きではその程度にまだ青臭い。彼は，実際苦労することなしに沢山の意見を身につけていたが，それは自分たちの好みを知っていた先祖たちによってひき継がれて既成の状態で彼に授与されていたのだ。このことは，もちろん，—— 強く迫られたりすれば，彼はもともと率直なので認めただろうけれど —— 意見というものを供給するには非科学的な遣り方である。この青年は，頑固な保守主義者であり，ユンカー中のユンカーだった。だから，近代デモクラシーを一時的な一段階と考えており，偉大な共和国でそれに反対できる多くの論拠を見出すことを期待していた。このようなことに関しては自分は申し分のない訓練を受けていて証拠の本質を徹底的に識別することを教え込まれていると自覚するのは良い気分だった。船は夥しい数のドイツ人移民を乗せていたが，彼らの合衆国での任務はオットー伯爵のそれとは随分異なるものである。彼らは舷牆にかぶさるように群がっている。彼らは肘をついて上体を前屈みにして肩のところまで耳を埋めた姿勢で

何時間もいた。毛皮のキャップを被って火皿の深いパイプをくゆらせている男たちやひどく汚いショールに赤ん坊を隠している女たちであり，何人かは黄色人種のような，また，黒人種のようなドイツ人であった。皆，あぶらじみて海の湿気でくすんでおり，西方の国のデモクラシーの趨勢をさらに一層強めることになるよう運命づけられていた。フォーゲルシュタインは，この人たちはそれの質を決して高めはしないだろうと思った。けれども，彼らの数の多さは驚異的であり，この際立った徴候の本質について彼がどう考えたかは不明である。

サウサンプトンで乗船した客たちは，あぶらじみた階層ではなかった。夏か又はそれよりも長い期間をヨーロッパで過ごしたアメリカ人の家族が殆どであった。旅行鞄，膝掛け，バスケット，海浜用椅子など，沢山の旅行荷物の所有者であり，さまざまな年齢の婦人が主であった。彼女たちは何かを予測して少し青ざめ，三等船室で幼児の世話にかまけている母親たちよりずっと奇麗な縞模様のショールにくるまり，高い帽子と羽根で頭を飾っていた。彼女たちは互いに相手を，又，自分たちの小荷物を探して通路を横切ってあっちへこっちへ駆けずった。離れ離れになり，一緒になり，叫び声をあげ，意見を表明し，前方領域の占領者たちを驚愕の目でじろじろ見た。そこの輩は，船を沈めてもおかしくないほどの夥しい数だったのだ。連中の声がコールタール塗りの巨大な船腹を越えてきてフォーゲルシュタインの耳に届くとき，それは，微かに遠く聞こえた。彼は，新しく乗ってきた分遣隊の中には若い娘たちが何人もいるのに気付き，ドレスデンの婦人が —— アメリカは Mädchen の国ですよ —— と彼に言ったことがあるのを思い出した。そのことは自分は気に入っているだろうかと考えてみたが，これは他のあらゆることと同様研究すべき側面であると見做した。ドレスデンで3人娘のいるアメリカ人家族を知っていたが，彼女たちは将校たちと一緒にスケートをしていたものだ。そして，今乗船してくる淑女の何人かがその娘たちと同じ服装だという印象を与えた。ただ，ドレスデンの頃は飾り羽根はこんなにも高くかかげてはいなかったという点だけは違っていた。

遂に，船がきしんで，ゆっくり動き始めた。サウサンプトンでの遅滞は終わったのだ。舷梯が取りはずされ，船は陸から離れていくための奇妙な旋回に入った。フォーゲルシュタイン伯爵は葉巻を喫い終えていた。上段デッキをあっちこっち歩いて長い時間を費やした。イギリスの魅力的な海岸が彼の前を過ぎていく。これが旧世界の見納めだな，と感じる。アメリカの海岸も奇麗かもしれない —— アメリカの海岸に人はどのようなものを期待するのか，彼にはどうも判らなかった。けれども，それがこれとは異なるだろうということは確信がもてる。そして，相違というものは疑いようもなく旅の魅力の半分である。その相違が，記号，数字，図表，または単に実用的な表象というものでは表現できない性質のものである場合には，旅の魅力の大部分とさえなるのである。今のところ，この汽船の上で目に映るものの中には，まだ相違は殆ど無いといってよかった。船客仲間の殆どが同じ種類の人たちらしく，その種類たるや，間違えられることの最もなさそうなものであった。彼らはユダヤ人であって，ひとり残らず営利業の人たちだった。既に葉巻に火を点けており，あらゆる種類の海上旅行用のキャップを被り，幾つかには大きな耳覆いが付いていて，どういうわけか，それが彼ら特有の顔の類型を目立たせる効果をあげていた。新しく加わった旅行者たちが，やっと下から姿を現わして，あたりを見回しはじめた。その顔には，新しく乗船した人たちに常に見られるあの疑い深い表情が浮かんでおり，退いていく陸にそれは向けられていて，策略にはめられたということに気付きはじめた人の表情に似ていた。陸と海は，この人たちの視線をあびるとき，すさまじい異議の対象にされていた。そして，それぞれに共通の状況の中で，多くの旅行者は，騙されたという思いと傲慢な気持ちを同時に抱いているような態度をとり，その気になれば簡単に陸へ戻れるんですよ，と言っているかのようだった。

ディナーまでに，まだ，2時間あった。長い脚で3，4マイル歩き終える頃迄には，フォーゲルシュタインは，海浜用椅子に腰をおろしてアメリカ作家のタウフニッツ版の小説をポケットから取り出して読もう，という気になっていた。この本に書いてあることが，向こうでの奇異な出来事に対処する備

えを固めるのに役立つだろう，と思い込んでいたのである。椅子の背には，大きな文字で彼の名前が記されていたが，これは友人の勧めに従った用心である。アメリカの汽船では，乗客たち —— 特に婦人たち —— は，生活を快適にしてくれるちょっとした物を他人からくすねるのを何とも思わないのだ，とその友人は話してくれたのだ。友人は，伯爵家の宝冠の正確な複製を作るように，それとなく勧めさえした。アメリカ人というものは貴族の宝冠にいたく感動するものなんだ，とこのおそろしく世慣れた男は付け加えた。フォーゲルシュタイン伯爵は，懐疑ゆえか控え目な気持ちからか，象徴的しるしによって自分の地位を主張することは一切省いた。場合によっては利用できたかもしれないものが他にもあったのだが。大西洋旅行中のどのような震動に対してもびくともしないと信頼されているその家具は，彼の肩書き付き名前で飾られているだけだった。その文字は，たまたま，非常に大きく描かれていた。椅子の背は，でっかいドイツ文字で覆われていたのである。この公使館付き書記官が腰をおろすとき，椅子のその部分を，乗船仲間の目が届かないように外側に —— デッキの欄干の方に向けていたのは，将に，彼の控え目な気持ちからに他ならなかった。これは，疑う余地の無いことである。船は，ニードルズ —— ワイト島の美しい最果ての地点 —— を通過していた。幾つかの丈高い円錐状の白い岩々が紫色の海面から突き出ている。それらは，午後の光に輝き，ほのかな薔薇色に染まっている所為で，人間味ある表情となり，船の進行方向の冷たい広がりと向き合っていた。それは，さよなら，と言っているようで，人の住む世界の最後のしるしとなっていた。フォーゲルシュタインは，自分の位置から，とても良い気分でそれらを見た。暫く経ってから，反対の方角に目を転じた。そこでは，空と水との対照があまりにも妙味に乏しかった。例のアメリカ人作家の作品さえ，これよりは増しだった。彼は，作品に目を戻そうとした。が，彼の視線が描いた大きな曲線の中に，忽然と，若い女性の姿が現れ，視線を捉えた。たった今，彼女はデッキへ上がって来たところだ。昇降口で立ち止まっている。

このこと自体は，驚くような現象ではなかった。フォーゲルシュタインの

注意を惹いたのは，その女性が彼に目を釘付けにしていたように思えたことである。彼女は，ほっそりしていて，服装が明るく，かなり可愛い。フォーゲルシュタインは，サウサンプトンの埠頭の人群の中にいたこの女性に自分が目を留めたのを，瞬時に思い出した。観察されていることに，彼女は，すぐ気付いた。すると，彼に接近しようとする魂胆を示す歩き方でデッキを移動し始めた。ドレスデンで知っていたあの娘たちのひとりだろうか，と考えてみる余裕がフォーゲルシュタインにはあった。が，あの娘たちなら，今は，もっとずっと齢を取っているだろう，と考え直した。彼女たちには確かに，この女性のように，かもに向かって直進してくる傾向はあった。しかし，目の前の奴さんは，もはや彼を見てはいなくて，彼の側を通り過ぎはしたが，ざっと概観するためにだけ上がってきたということが，今や，かなりはっきりした。彼女は，俊敏で，きりっとした，有能そうな若い女性である。そのような位置から，船や天気やイギリスの外観について，また，多分，乗客仲間についても，どのように把握することができるかを知りたがっていただけなのだ。これらの点については，彼女は直ちに満足した。それから，歩きながら，何か失せ物を熱心に探しているかのように見回した。その結果，やっと，彼女の本当の動機についてフォーゲルシュタインは確信を得た。彼女は再び彼の側を通ったが，今度は，目を注意深く彼に注いで立ち止まりかけた。彼女が見ているのは，黄色い口髭を生やした彼の顔ではなくて椅子だということが判った後でも，彼女のこの行為を注目に価するものだと彼は考えた。そのとき，友人の言葉が蘇ったのだ —— アメリカの汽船の人々，特に婦人たちに，他人の所有物を自分のものにしようとする性向がある，というあの言葉が。特に婦人は，とはいみじくも言ったものだ。ここに，僕が腰掛けている将にその椅子を引き抜きたがっているのがいるではないか。彼女が椅子を欲しいと言いだしやしないか，と彼は恐れた。だから，読んでいる振りをして，彼女の視線を意識的に避けた。自分の近くを彼女がうろうろしているのが気にはなって，何をするつもりなのかをいっそう知りたく思った。こんなに器量の良い若い女性 —— というのは容姿にほんとうに魅力があったか

らなのだが —— が，公使館付き書記官の静かな威厳に，これほど破廉恥な遣り方で働き掛けてこようとしているのが解せなかったのだ。遂に，この女性が，椅子の縁ごしに，いわば，そこをちょいと覗いて —— 背側に記されているものを見ようとしている，ということが明白になった。「名前を知りたがっているんだ。僕が何者かってことを！」という考えが頭をかすめて，彼は目を挙げた。視線を，彼女の目に注いだ —— かなりの間，彼女は目を逸らさずにいた。彼女の目は，華奢な鈎鼻の上できらきら輝き，表情豊かだ。鼻は可愛いが，鷹に少しだけ似過ぎているようだ。実に不思議な偶然の一致があるものだ。というのは，ここでフォーゲルシュタインが読んでいた物語が，ホテルの庭で若い男の前に突っ立っているとっぴで生意気な可愛いアメリカ娘の問題を扱っていたからである。目前の若い女性の行為は，この物語の真実性を証明するものではないだろうか。そして，フォーゲルシュタイン自身，庭の青年の立場にいるのではないだろうか。その青年—— 普通の場合のそのような関係では，もっと多くの取るべき手段もあったのだが —— は，結局，侵略者と呼んでもよいその女性に話し掛けることになるのだ。そして，フォーゲルシュタインは，極く僅かに躊躇したあと，物語の青年の先例に従った。「僕が何者であるかを彼女が知りたいというのであれば，結構なことだ」と彼は考えた。椅子から身を離すと，それの背を掴んでぐるっと回して，そこに記してある文字を相手に示した。彼女は顔を僅かに赤らめたが，微笑んで彼の名前を読んだ。フォーゲルシュタインは，帽子をもちあげて挨拶した。

「ほんとうに有り難うございます。結構ですわ」彼の名前を知ることができてすごく幸福になったかのように，彼女が言った。

自分がオットー・フォーゲルシュタイン伯爵であるということは，彼にとっては，申し分のないものとしてつよく意識されていた。だから，相手のこの態度は，その事実を処理するにはむしろ無躾な遣り方に思われた。それに対する言い返しとして，彼は，椅子を譲って欲しいのか，と尋ねた。

「まことに有り難うございます。でも，もちろん，そんなことは望んでお

りませんわ。あたし，貴方が，あたし達の椅子を持ってらっしゃるのだと思ったのです。それで，そんなこと，貴方に質したくなかったのです。これ，あたし達の椅子とそっくりですわ。今は貴方が腰掛けてらしたときほどは，似てないけど。どうか，お掛けになって下さい。ご迷惑掛けたくありませんわ。あたし達，椅子が，ひとつ，無くなりましたのよ。だから，あたしが，ところかまわず探してたってわけなんです。ほんとによく似てますわ。背側を見るまで判定がつきませんものね。あたし，もちろん，貴方の椅子については間違いようがないってこと，判りましたわ」若い女性は，微笑を浮かべて言った。その安らかな微笑は，彼女の他の豊かな魅力とよく釣り合っていた。「あたし達のは，とっても小っちゃな名前なんです —— 殆ど見ることができないくらい」彼女は，相変わらず，親しみを込めて付け加えた。「単にデイ —— あたし達が精いっぱい主張しなかったら，名前とは思われないでしょう？　この名前が記されているのを目にされたら，教えて下さいな。感謝しますわ。あたしの為じゃなく，母の為なんです。母は，とても椅子に頼ってるものですから。あの椅子，とってもうまい具合に拡がるんです。そういう風にお掛けになって，下の部分を隠してしまわれると，あの椅子とほんとにそっくりですわ。ええ，あの椅子，どっかにあるにちがいありません。ご免なさい。お邪魔したくありません」

これは，未婚らしい若い女性が，全くの見ず知らずの相手に対してするにしては，長いうえに打ち明け話のようなところさえあるおしゃべりだった。しかし，デイ嬢は，それを，至極あっさりと，沈着にやってのけた。彼女は，頭をつんと立てるようにして，歩き去った。清潔で滑らかなデッキを踏みつけていく，ほっそりとした形のいい足を，フォーゲルシュタインは見ることができた。彼女がタラップを降りて姿を消していくのを見つめながら，自分は，まるで，今読んでいるアメリカの小説の中の青年のようだ，という感を彼は一層深くした。彼女の微笑んでいる目としゃべっている唇の残像がまだ目の前にちらついていたので判断するのは容易だったのだが，この若い女性は，物語のヘロインよりも年上で，また，ヘロインほどには奇麗ではなかっ

た。物語が，この女性についての知識を与えてくれるだろうという思いを抱いて，彼は再び読みはじめた。これは，どちらかといえば，論理的ではない。が，フォーゲルシュタイン伯爵の側に或る程度の好奇心があるということを示している。物語の娘には母親があるようだったが，この女性も同じだった。前者には弟もある。そして，彼は，デイ嬢の弟らしい若い男 —— 白いオーヴァコートを纏ったシルクハットの青年 —— が，埠頭にいたのを，今，思い出した。同じくシルクハットを被り黒のオーヴァコート —— 全くの黒ずくめ —— を着た年長の別の男がいたことも，次第に思い起こされてきた。この男がいることでグループらしくまとまっており，家族の長と思われた。こんなことを色々考えていたということは，フォーゲルシュタイン伯爵がタウフニッツ版の本を，どちらかといえば，散漫に読んでいたということになるだろう。そのうえ，このような妄念は，意識の節約という点では放漫経済の最たるものだった。何故なら，彼は，これからの10日間，長方形の箱の中でこの人たちと一緒に航海することになっているのではなかったか。少なくとも，この人たちを充分見るだろうということは疑い得るものだろうか。

彼がこういう人たちを沢山見たということは，おくれないうちに記しておくほうがよいだろう。彼とデイ嬢との出会いを，或る程度詳しくスケッチしたのは，この公正なチュートン人にとって，それが重要な意味をもっていたからである。但し，これにつづいて起きた出来事については，簡単に通過しなければならない。こんなことのあった後で，この若い女性との関係で自分が取るべき道はどのようなものであろうか，と彼は考え，例のアメリカ小説を読み通して，ヒーローが何をしたかを発見してやろう，と心に決めた。そして，間もなく，生育地の風土の幾つかの痕跡以外の点では —— また，男性を怖がらないということを除いては，デイ嬢と作品のヘロインとの間には何の共通点も無いことを知って，彼は満足した。この女性にくっきりと印されている特定の土地の刻印については，彼は，ありのままの見方というよりも，むしろ，借り物の観点に立って評価を下していた。それは，彼がよく会話を交わした乗客仲間のニューヨーク出身の婦人が，あの娘はアメリカ大陸

の奥地の出身だから“寒気立つ”ほどヤボなのよ，と告げたからである。ただ，どのようにしてこの確信を婦人が抱くようになったかは，明らかではなかった。というのは，婦人がこの娘と何の交際もしていないということに，フォーゲルシュタインは気付いたからである。アメリカ人というものは他のアメリカ人がどんなアメリカ人であるかがすぐ判るのだ，と言い張ることによって，婦人がこの主張を正当化しようとしたのは本当だった。彼女自身が，国民の中の批判する半数と批判される半数のどちらに属しているかの判断は，彼に委ねられた。デインジャーフィールド夫人は，きりっとして美しく，打ち解けた感じの，取り入ってくるようなところのある女性だった。フォーゲルシュタインは，彼女と一緒だと，自分のおしゃべりが，ほんとうに広い範囲にわたって拡がっていくのを感じた。偉大な民主主義社会でも人間の差異があること，そして，アメリカの生活は，往々にして外国人には看取できない微妙なニュアンスの社会的区別でいっぱいだということを，彼女は，手際よく彼に納得させてくれた。世界一巨きな国でも誰もが自分以外の総ての人を知っているとでも，また，最も君主的で排他的な社会での場合と同様に自由に，人はこの国で仲間を選ぶことができないとでも，貴方は想像したのですか。彼女は，このような妄念を一笑に付した。このとき，フォーゲルシュタインは，美しい毛皮の覆いを —— 長く引き伸ばしたそれぞれの椅子に，ふたりは，共にゆったりと身をしずめていたのだが —— 彼女の足に掛けてやっていた。アメリカ人の淑女が，いかに自由に仲間を選べるかを，船上でオットー伯爵以外の誰とも知己とならなかったことで，彼女はたっぷりと証明してみせてくれたのである。

デイ夫妻のほうには，夫人のこんな気取った様子が全然無いということを，彼は，自分で見てとることができた。夫妻は，質素で真面目な，肥った人たちであり，デッキの上に隣り合って何時間も座って，前方を真直ぐ眺めていた。デイ夫人の色白の顔には，大きな頬と小さな目が付いている。額は，ぴっちりと詰んだ黒いおびただしい巻き毛で囲まれている。ハッカドロップをいつも口に含んでいるかのように唇が動く。デインジャーフィールド夫人は，

それを“ヌービー”と言っているのだが，デイ夫人が頭部に巻き付けているのは，緋色の編みスカーフであり，彼女の髪毛を隠し，首を取り巻き，それの渦の空洞から，完全に無表情な顔が覗いている。手は胃の上に組まれており，包み込まれて静止した姿の中で，小さなビー玉のような目は視線の向きを折々変えて動き，それだけが生きているということを示している。夫は，顎に硬い灰色の髭を生やし，鼻の下が広くて剥き出しの感じで，剃り続けられたために硬い光沢を帯びるようになっていた。眉毛が濃く，鼻孔が広い。サロンで帽子を取ったら，しらが混じりの髪毛が密生して直立していた。彼の，大きな灰色の瞳 —— 静かな男の落ち着きのある目 —— の，物事を考察しているようにみえる，穏やかで親しみのある，組みしやすそうな凝視というものが若し無かったならば，その容貌は，むしろ，険しく好戦的に見えたかもしれない。彼が敵意よりは親愛を示していることは明らかなのだが，それは，好意的というよりは，控え目であった。彼は，人を見ることは好きだが，かといって，深い理解や格付けができるという振りをしたりすることはなかっただろうし，それで人に精神的負担を感じさせたりすることがあれば，済まなく思ったであろう。夫妻は，ときに，ものを言うということはあったが，それが会話になるということは殆どなかった。そして，ふたりには，何かはっきりとしない忍耐強いところがあり，魔法にかけられているかのようだった。尤も，それは，気味の悪い種類の魔法ではないのだが。それは，幸運による恍惚とか保証の確信という風なものであり，そういうものは人を横柄にすることがよくあるものだが，足ることを知っているこの素朴な夫婦には，そういうこととはほど遠い効果を及ぼしていた。この夫婦にあっては，あらゆる種類の発展というものが，うまい具合に引き止められているようだった。

オットー伯爵は，毎朝，朝食後に日記をつけることにしていたが，その時間帯に，老夫婦がパンドーラによって船上へ導かれ，いつもの定まった一隅に据えられる，ということを，デインジャーフィールド夫人が報らせてくれた。夫人は，パンドーラというのがその姉娘の名前だということを発見して，

とても面白がっていた。“パンドーラ”―― これは，もう最高に典型的な名前だというのだ。この名前は，ほかの証拠が欠けていたとしても，彼女たちを社会のはかりにかけてしまう。このような名前を持っている場合には，それによって，若い女性が，奥地の，それも，神秘的な奥地からの出身だということが判るのだった。フォーゲルシュタインは，そんな奥地を想像して，ひどく興奮したのだが。この若い女性は全家族の世話をしており，ひだ飾りだらけの妹の面倒までみていた。妹の目は，大胆そうで，愛らしく，無邪気で，絹のごとき金髪の奔流の上に，トルコの男が被っているようなトルコ帽をひどく傾けて被り，誰彼と一緒に船のあちこちを駆け回ったり股を広げて歩いてみせたりしていたが ―― 痩せた長い脚，ひどく短いスカートとあらゆる色合いの靴下 ―― 優雅なフランス服を着て，中断された学校での勉強を再開すべく，一路，故国を目指して帰って行くところだった。この肉親たちをパンドーラは監督指導していたのだ。彼女がとても活動的で断固としているのを，また，彼女には高度の責任感があって，奥地出身の家族というものに持ち上がってくる問題の殆どをその場ですぐ解決しているのを，フォーゲルシュタインは，自分で見てとることができた。

船旅は，とても素晴らしかった。くる日もくる日も，海の空の下に腰をおろして，自分自身が地球の大きなカーヴを回っている，と感じることができた。輪郭のはっきりした大洋の黒い環の中で，長いデッキが白い点となっている。そして，強烈な海光を浴びて，船客たちの靴が今や弁別の目安となって，ときには苛立たしく，この，あらゆる声を弱々しく殆どの言葉を間の抜けたものに感じさせてしまうような，途方もなく“広闊な”大気の中を，航行についてのさまざまな意見を撒き散らしながら，行きつ戻りつしている。その馴染みの床の上には，煙の吹き流しの影が揺れている。フォーゲルシュタインは，既にアメリカの小説を読み終えており，パンドーラ・デイについて，全然物語のヘロインのようではない，という判断をくだしていた。全く違うタイプなのだ。物語のヘロインよりも遥かに真面目で精力的であるし，彼の以前の想像に反して，紳士たちとやたらに知り合いになりたがるという

こともなかった。あの日の翌日，彼女は，彼を追い越しながら友情的ともいえる微笑みを浮かべて，「問題ございませんでしたわ！　あの古椅子，ありましたの」という言葉を投げた。この程度にはその出来事を跡追いしたものの，あの最初の午後に彼に話し掛けたのは，彼女自身にとっては，どうってことのない付随的な出来事に過ぎなかったのだ，と彼は信じるほかなかった。以降は，2度と彼に話し掛けなかったし，視線を向けてくることもなかったのだ。彼女は多読家だったが，それは，殆どいつも真新しいフランスの文学書である。サント・ブーヴとかルナンの作品であって，軽いものではなかった。気晴らしの場合でも，せいぜい，アルフレッド・ミュッセの作品だった。彼女はよく運動したが，大概，ひとりで歩いていた。船上で友達を沢山作ったりしていないのは明らかであり，また両親によるそういうものの供給源が無かったのだ。両親は，既に述べたとおり，娘がその日その日のために据え付けてやる居心地の良い一隅から外へ出るということはしなかったのである。

弟のほうは，いつも喫煙室に居た。非常にぴっちりした服を着て，柵のようなカラーで首を囲っている。その青年を，其処で，フォーゲルシュタインは観察した。青年の顔は，小さくて鋭いが，不愉快なところはなかった。すごい数のシガーを吹かし，まだ早い時刻にアルコールを飲み始めるが，彼の外観には，これらの放縦の痕跡は見られなかった。ユーカーやポーカーなど，その場の他の娯楽に関しても，それで自分の手を汚すということはしなかったが，彼がこれらのゲームを完全に理解しているということは明らかだった。というのは，彼は，人々がゲームをしているのをいつも注視していたし，時には公平に助言していたからである。だが，彼がカードを手にしているのをフォーゲルシュタインは一度も見たことがなかった。議論百出の問題点について意見を求められ，彼の意見が勝利を収める。普段はゆったり構えており，喫煙室の至る処で交わされている会話に加わるということも滅多にない。が，時々，誰しもがわざわざ耳を傾けるような考えを，やわらかく落ち着いた若い声で口にしては，どっと受けていた。フォーゲルシュタインは，英語をよく知ってはいるものの，冗談は希にしか判らなかった。この青年のは，大陸

全体で賞賛され楽しまれているアメリカのユーモアの選り抜きの実例であり，熟達した外交官ならばこれをはっきり理解することができるが，それも，ある特別の測り難い啓示を得たときのみに限られる。少なくとも，こういうことが，彼には判った。青年は，彼なりに非常に注目するに価する人物だった。というのは，笑いがおさまったあとでフォーゲルシュタインは耳にしたのだが，青年は19歳にすぎなかったのだから。姉のほうは，既に述べた物語のひどい娘には似ていないとして，この若いデイ氏とタウフニッツ版の哀れな娘の弟ということになっている少年 —— いわば，キャンディー好きのマディスン，ハミルトン，ジェファースン大統領閣下 —— との間には，少なくとも類似があった。青年は，その小さなマディスンが成長して19歳になればきっとこんなだろう，と想像できるものであり，その進歩は予期を遥かに上回っていた。

歳月は永いが，旅は短い。結局は抗いきれなくなる奇妙な質の魅力に屈して，デインジャーフィールド夫人の強調した忠告に背いてパンドーラ嬢にちょっとした持続的な会話をする機会を求める，ということをフォーゲルシュタインがまだ実行しないうちに，旅は終わりかけていたのだった。そして，これとは無関係に彼が現にあじわっていた他の諸々の感銘には触れないでこの衝動のことばかりを言うのであれば，それは均衡を損ない，誤った考えを与えることになるだろう。しかしながら，この衝動のことに触れずに通り過ぎるのでは，もっと不公平なことになるだろう。知っての通り，ドイツ人たちは卓絶した民族なのだが，機敏で，利発で，もの静かなこの若い女性の中には，フォーゲルシュタインが抗しきれなくなる魅力があった。彼女は，一瞬にして微笑んで多弁になることができ，子として相応しい性格に類希なる創造性を加えている。また，読み進むにつれてページを切っていきながら書物の上に傾けていたり，背後に取り残されていく水平線の方へ思いに耽る様子で舷側から向けていたりする彼女の横顔，その横顔は，優美だった。しかしながら，彼女と交友関係を結べる可能性について考えるとき，両親が愚鈍な小市民であること，弟が上流階級の青年というものについて彼が抱いている概念

に適合しないこと，また，妹が将来はデイジー・ミラーのような女性になりそうな子供であること，これらのことを彼は残念なことだとおもった。デインジャーフィールド夫人から繰り返し警告されて，この若い外交官は，合衆国滞在中の初期に結ぶことになる人間関係については二重に用心深くなっていた。赴任地での最初の年は，いや二年目の年でさえも，慎重にするための年であるということに夫人は注意を喚起してくれたし，また，彼は，他の幾つかの首都で，そういう所見を自分で抱くようになっていたのであった。その段階では，人は，釣り合いと値打ちというものがまだ判らない。間違いの危険にさらされており，親切に対しては感謝する。そして，後で自分を苦しめる重荷のようなものになる連中に身を委ねる羽目になるかもしれない。このような意見をデインジャーフィールド夫人は述べ続け，そのしらべは青年のイマジネーションの中に蘇って鳴り響いた。“用心”をしなければ，我慢ならないような家族を持つアメリカ女に身を縛られることになるだろう，と夫人は断言したのだ。アメリカでは，言質を与えて誓うようなことになれば，祭壇に向かって行進する以外に道が無くなるのだった。これは，あの夫婦の椅子の背に記されているイニシャルなのだが――例えば，P. W. デイ夫妻――の近親者に自分が成る，ということについては，彼はどう考えるだろうか。アメリカ女性と結婚した1ダースにのぼる人たちをすぐ思い浮かべることができたし，オットー伯爵は，危険を感じた。彼は，今や，アメリカ女性と結婚するという危険に絶えずさらされているようだ。このことは，鉄道，電報，ダイナマイトの発見，シャスポウ銃や社会主義精神と同様，ひとが考慮に入れなければならないことだった。それは，近代生活の厄介な問題のひとつである。

際立って美人というわけでもなく全部で10分しか言葉を交わしたこともないこの若い女性への情熱に足を掬われることを彼が恐れているといえば，疑いもなく，それは言い過ぎになるだろう。しかしながら，元気はよいが，イギリス人たちのいう不身持ちなところが少しもなく，破壊的な考えの持ち主でもなく，口の輪郭に魅力のあるこの女性の肉親に，それ以上目立ったもの

にならないで欲しいと望むところまで彼が深入りしていたのは確かである。自分の情熱を向けているこれら肉親に対する彼女の行動には，おかしみを印象づけるところがあった。自分が世話すべきものとして考え，利害関係とは見做していない。彼女の面目を重んじる気持ちに彼らはゆだねられ，彼らを無事に目的地へ届けるということを彼女は責任をもって請け合っている，という感じだ。彼女は，超然としており，迂闊であり，突然思い出しては後悔し，引き返してきてふたりを毛布にくるみ込み，母親の傘の位置を直し，ふたりに，航海について何か話してやるのだった。ちょっとした，これらの仕事は，いつも，器用に，素早く，無駄口なしで執り行われる。娘が近づいてくると，デイ夫妻は，掻いてもらえるのを期待している2匹の飼い犬そっくりに目を閉じる。

或る朝，彼女は，上へ船長を連れてきて，両親にひき合わせた。船長とは，個人的で独立した交友関係にあるようだった。船長を両親に紹介するという考えは，不意に浮かんだうまい思いつき，という感じだ。紹介というよりは，それは提示であり，まるで次のように言っているようだ。「このとおりなんですよ。どんなに気持ち良くさせてあげてるか，ご覧なさいな。風変わりで，いとしい人たちではありませんか。しかも，あたしを完全に自由にしておいてくれますのよ。ええ，ほんとに確かに，請け合って。それに，貴方は，ご自分でご覧になるべきですわ」打ち解けた態度のこの高位の人物を，デイ夫妻は見上げたが，表情は殆ど変えなかった。それから，互いに顔を見合わせたが，やはり表情は変えなかった。船長は挨拶して，僅かの間，少し身を屈めた。が，パンドーラが首を振り，ふたりに代わって色々答えようとしているようだった。両親の風変わりなところのいくつかを，善良な船長に教えようとするかのような，例えば，もの言うことを彼らに期待するにはおよばないといっているかのような，そんなちょっとした身振りをしてみせた。遂に，両親は目を閉じた。彼女が催眠術のごとき影響を与えるようである。そして，デイ嬢は船長と共に歩み去ったが，この地位の高い友人が気を遣って彼女を扱っていることは明らかであり，少し後で別れるとき，その地位にも拘わら

ず，彼は深々と頭を下げたのである。彼女には人に感銘を与える力があるということを，フォーゲルシュタインは悟ることができた。そして，この小さな出来事がのこした教訓は，デインジャーフィールド夫人があれほど警告し，慎重に構えようと彼も心に決め，接触があったといってもほんのちょっとの間のことに過ぎなかったし，それに，あのような両親や喫煙室の青年のような弟がいるということなどこれらの総てのことにも拘わらず，この女性が彼の気持をしっかりと惹き付けて離れられなくした，ということだった。

気持に抗いきれずに，ぎこちなく，唐突に，彼が，デッキで彼女の散歩に加わることになったのは，船長との場面のあった日の夜のことに他ならなかった。彼女は，デッキをゆっくりした足取りで行ったり来たりしていた。都合よく穏やかな刻で，星が際立って素敵だった。あっちこっちで，談話者，喫煙者，２人連れなどが，薄闇の中に忙しなくうごいていたが，弁別はできなかった。ゆったりとした規則的な揺動のリズムを伝えながら，船体は水中にどっぷり浸っていた。かぶさってくる星群の下で，それは，ぼーっと幻影のようであり，揺れている尖塔には灯が点々と点り，闇の中を昼間よりも早く進んでいるようだった。オットー伯爵は，デッキに出て歩いていた。若い女性が自分のそばをすれすれに通り過ぎたとき，海の湿気から保護するためのヴェールの下に，パンドーラ —— デインジャーフィールド夫人と彼の間で話題になるときはいつもこの名前だった —— の顔を彼は識別した。立ち止まり，踵を返し，急いで後を追い，葉巻を捨て，—— 腕を取っていただくという光栄に浴させてもらえるのだろうか，と頼んだ。彼女は，腕のほうは断ったが，並んで歩くことはゆるした。それからの１時間ほどを，彼は彼女と一緒に過ごして，彼女はそれを楽しんだようだった。ふたりは，随分おしゃべりをした。そして，そのとき彼女の話したことの幾つかを後で彼は思い起こすことになるのだが。船が明後日の朝にドック入りするということが，今や確実となっていて，それ故に，或る慎みのない話題がとび出したのだった。彼女の表現の或るものは，奇異という印象を彼に与えた。尤も，いうまでもなく彼の英語の知識は，自分でも意識しているとおり，まだ完璧な判断がで

きるほどではなかった。

「あたし，早く到着したいわけじゃないんです。この船の上でとっても幸せですもの」と彼女は言った。「家族を通過させるのに苦労しそうですわ」

「通過？」

「税関を，ですわ。とっても沢山買い物してるんですもの。でも，友だちに手紙書きましたから，助けてくれるでしょう。その方，所長さんをとてもよく知ってますから。いったんＯＫのチョーク印をもらえさえすればいいのです。兎に角，もう黒板のような気分ですわ。あたし，あの連中がどんなに恐ろしいかってこと，ドイツで思い知らされてますの」

手紙を彼女が書いた友だちというのは恋人だろうか，ふたりは婚約しているのだろうか，とオットー伯爵は考えた。彼女が「来てくださるあの方」とその友だちのことを表現したとき，彼は特にそう思った。旅行のこと，旅行中の印象，ヨーロッパに長く滞在したかどうか，一番気に入ったものは何か，こんなことを彼は訊いた。ちょっとした新鮮な経験を得る為に家族で外国へ出掛けていった，というのが彼女の答えだった。この女性がとても知的だということは判ったが，彼は，この女性は，きっと，ドイツ人は教養が豊かだということを耳にしたことがあり，彼がドイツ人なので，こんな理由を挙げたのだろう，と想像した。デイ夫妻は，どんな文化をイタリアとギリシャとパレスチナ――彼らは，２年間に亙る旅行であらゆるところに行った――から持ち帰ったのだろうか？　娘が，「父と母には最上のものを見て欲しかったのです。アクロポリスのうえで３時間過ごさせましたから，決して忘れないでしょう！」と言ったときには，とりわけ，彼はそういう思いに捉えられた。膝掛けにくるまれて黙想しているときに，彼らが想いを馳せているのはフィデイアスとペリクレスについてだろう，とフォーゲルシュタインは考えた。幼い妹がまだ比較的成熟していないうちに，総てを見せてやりたかったから，ともパンドラーは話した。（“比較的だって！”彼は無言で息をのんだ。）まだ初々しい心には優れた光景はいっそう強い印象を刻みつけるものだ，というようなことを，ゲーテの作品のどこかで彼女は読んだことがある

のだった。妹ぐらいの年齢の頃にヨーロッパへ来ることが彼女自身の夢だったのだが，当時は，父親はまだ現役で働いていたし，ユーチカを彼らは離れることができなかったのである。パルテノンとオリヴ山で跳びはねている，本来なら学校で過ごすべき2年の歳月を両親の途方もない巡礼に加わって過ごしている，その幼い妹を，彼は思い描いた。そこで，ゲーテの格言は正当化されたかどうか。ユーチカはご家族の母なる地なのですか，重要な，または典型的な土地ですか，他国者の彼が見るのには面白い町でしょうか，パンドーラに彼はこんなことを尋ねた。難問ですわ，というのが彼女の答えだった。間もなくあたしたちはその土地を離れるのですが，そうでなければ，やはり，「故郷のあたし達を訪ねて下さい」って言うでしょう，と付け加えた。

「ほう，どっか他の土地で暮らすのですか」こんなこともまた典型的なことなのだろうか，と言わんばかりに訊いた。

「ええ，ニューヨークへ出る手立てを考えてますのよ。あたし，今度の旅行で，家族を解放してあげたって，自負してます」若い女性は続けた。「あの人たち，この旅行の魅力ほどのものは，ユーチカでは経験できませんもの。これが，あたしの考えなんです。あたしは，でっかい処が望みなんですよ。ユーチカは，もちろん――！」複雑で表現がむつかしくなったときのように，彼女は言葉を跡切らせた。

「ユーチカは，劣ってるから――？」フォーゲルシュタインは，何とか示唆してやろうと言わんばかりだ。

「いえ，いいえ。ユーチカが劣ってる，なんて，貴方に言わせておくわけにはいかないとおもいます。尤も，最高というわけではなくて――そこが問題なんですが。あたし，並みのものっていうのが嫌いなんですから」とパンドーラ・デイは言った。彼女は，この宣言をしながら，頭を僅かにのけ反らせて，軽い乾いた笑いを放った。そして，あいまいに揺れているデッキを踏みしめていく彼女を，薄闇の中に斜に眺め，その様子と態度に，このような宣言と一致する何かがあるのを彼は認めた。

「彼女の社会的地位は何なんですか？」次の日，デインジャーフィールド

夫人に彼は訊いた。「全然判らない —— あまりにも矛盾だらけで。彼女からは，すごい教養と大変な気力があるという印象を受けますし，姿もとても垢抜けしています。それでも，両親のほうは完璧な小市民だということ，それは簡単に見抜けます」

「まあ，社会的地位ですって」デインジャーフィールド夫人は，2，3度，大袈裟にうなずいた。「随分もったいぶった表現をなさること！　社会的地位なんてものが誰にでもある，と思ってらっしゃるの？　そういうものは，人類の中のきわめて数の限られた多数派の方たちの為に取っておかれるものなんですよ。ユーチカにはオッペラのボックスはあり得ませんし，同様にあそこでは社会的地位なんてものは持つことはできないのです。そんなもの，パンドーラにはありません。いったい何処で，あの娘はそれを手に入れればいいのです？　可哀想に。あの娘をそんな質問の対象にするなんて，正当なことではありませんわ」

「なるほど」とフォーゲルシュタインは言った。「彼女が下層階級というのであれば，それは，非常に —— 非常に ——」彼が英語を話しているときにはよくあることだが，ここでも，少し間を置いて，言葉を探した。

「非常に，何ですか，伯爵さん？」

「非常に意味深く，非常に暗示的で」

「まあ，あの娘は，下層階級ではありませんわ」折角知恵を絞ってあげたのにそれが無駄骨に終った，ということに苛立って，デインジャーフィールド夫人は言葉を返した。夫人は，自分の国のことを説明するのが好きだったが，それがうまくいくには，兎に角，意味の通じるレヴェルの相手が要るものだった。

「それじゃあ，何なんですか？」

「そうねえ。あのタイプは，あたしが故国を出てからのものですが，新型だってこと認めないわけにはいきませんわ。あのような肉親を持ったこのような若い女性 —— 新しいタイプなんです」

「新しいものが，僕は好きなんですよ」—— 余程の決心をしたという様

子で，オットー伯爵は微笑んだ。しかしながら，実証もされていないことを根拠として論を進めているにすぎないような説明では，彼は満足することができなかった。ニューヨークで下船したとき，波止場の混乱と口を開いて中身を剥き出しにされた荷物の山のただ中に身を置いていてさえ，彼は，パンドーラと彼女の家族が無名の群衆の中に紛れ込んで消えていくということに鋭い悔恨の念を抱いた。それでも，彼はひとつの慰めを得た。それは，何かの理由で —— 病気か，町を留守にしていたか —— 彼女が手紙を書いたという紳士が，どう見ても，来ていなかったということである。その同情心厚い人物が彼女を裏切ったということが，彼は —— 何故そんな気持ちになるかは自分でも判らなかっただろうけれど —— 嬉しかったのだ。尤も，その人がいなければ，パンドーラが，単独で，合衆国税関を相手に戦わねばならなかったのだが。ジャージー市のドイツ汽船下船場所で，この西方の国についての第一印象を，彼は意識に刻みつけられた —— 足に響きの伝わってくる木造波止場にかぶさる巨大な木造倉庫，ばらばらに傾いた粗切り杭で囲み込まれた広場，広場のあっちこっちにかたまり合って散在しているさまざまな種類の荷物の群れ。街に面した縁端に，ペンキを塗った丈高い尖り杭の柵があり，それの背後に貸し馬車御者の一群がいるのを，彼ははっきり認めることができた。彼らは，かもを待ち構えて，鞭を振り回している。ひっきりなしに，彼らの声が奇妙に鋭く響いて湧きあがったが，それは，激しい厚かましい呼び掛けの挑戦だった。柵の後ろの場所全体が，込み合って騒々しかった。あれこそがアメリカなんだ，とオットー伯爵は考えた。不屈の精神を奮い起こさねば，という気持で，その方角を眺めた。波止場では，人々が，トランクの間を慌ただしく動き回ったり，所持品を集めたり，散らばった包みをまとめようとしたりしている。頭にきて怒ったり，戸惑ってしまって気分を滅入らせたりしている。傷だらけになったトランクを早々と要領よく集めることのできた少数の者たちは，隣人たちのそのような努力に対して，冷やかな優越感をあからさまにしていた。船上で自分と他愛なく親しみ合っていた人たちを，彼らは，今は，見ることさえしなかった。そこでは，税関役人

の派遣隊が職務を遂行しており，精力的な旅客たちは，役人を自分たちの荷物のところへ引っ張ってくるか，重い荷物を役人のところへ引っ張っていくということに没頭している。役人たちは善良であり，能弁な旅客がトランクの中身がよく見えるように開いて懇願しているのへ，船旅はいささか“退屈”ではなかったですか，と声を掛けたりするとき以外は，彼らは無口だった。彼らの義務の果たし方は，好意的で，悠々としていて，思索的だった。当事者の名前が旅行鞄に記されているのを目にすると，知己のような声の調子で呼び掛ける。だが，彼らは打ち解けてはいても不注意ではないということを，フォーゲルシュタインは知った。アメリカでは公僕は皆同様であり，フランスでの所謂地位相応の異なる態度というものはないということを彼は耳にしたことがあるが，自分がこれから頻々と会う —— 会わなければならない —— ことになっているワシントンの大統領と大臣たちもこんな風なのだろうか，と考えた。（つづく）

（1989. 9. 30 受理）